
「伊丹」の由来（語源）

足立 繁

「伊丹」の由来（語源）については、いろいろな書物に記載があります。由来の説明は多く登場するのですが、全てに通じて言えるのは、「結局はわからない」ということになっています。「諸説ありますが…」良いことばですね。古代史は答えがはっきり出ない、想像を働かせる「あそび」があるのがいいところ。ロマンですね（笑）

地名研究「伊丹」の語源

「伊丹」がなぜ伊丹なのか？というお話でお付き合いいただきます。「伊丹」とは他地区と区別し認識するための土地につけられた名前です。地名研究という分野があって、その土地の語源などを研究する学問があるらしいのですが、私は、「地名の語源」は「言うたモン勝ち」と考えています。

理由は

1. 一般的に地名の成立した時期は古く、語源の調査が困難。想像でしかない。
2. 地名は生き物。時代時代で変化しており、解釈も変化する。
3. その語源がこじつけであっても、反論できなければ、罷り通る。たとえば、「伊丹市南野北」という地名は平成にできた地名であり、成立の過程（語源）は調べやすいのです。つまり、南野という村落のうち新幹線よりも北側の地区であると周知されています。しかし、ここで、伊丹市幹部と名乗る人が、「実は……、命名担当者の娘さんが喜多さんに嫁いたので、「キタ」に思い入れがあったところから南野キタと命名したらしい」とSNSに投稿すればどうなるでしょうか？また、伊丹の郷土史家が、その昔、日照りで飢饉が続き、降雨を願って、村人全員が「蓑」を着て毎日をすごした。そして後世の人は「皆。蓑。着た村」すなわち「ミナ、ミノ、キタ」となった。と雑誌のコラムに寄稿すればどうでしょう。50年後には、そのデータが採用される可能性があります。つまり、私は、地名の語源は「言うたモン勝ち」だと考えています。定説だっすぐに覆されます。私の説だっって主流に乗れるかもわかりません。

「伊丹」の漢字のなりたち

先ほど私は、「地名の語源」は「言うたモン勝ち」と考えていると書きましたが、ところが、何でもかんでも好き勝手かというところでもありません。自説を反論されないためには、現在公認の歴史を学ぶ必要があります。今はどう言われているかという事です。歴史を知る材料としては、まずは古文書があります。古文書は歴史の姿を鮮やかに浮き出してくれる大切な文化財だと考えています。古文書は文字で著されていますが、漢字が伝来したのは、古墳時代といわれています。（地名はそれ以前に存在していたと考えられますが）古文書による「いたみ」の初見は「伊多（太）美」と記載されています。（※12）

なぜ、この文字を使用したかは知る由もありませんが、たまたま漢字の音と「地名＝コトバ」の音をあわせたものと思われます。漢字は表意文字ですから、ここで、元来の「いたみ」の原形を失ったと言えます。

そして「音のみの地名」に漢字を充てる作業に、再度見直しが迫られることとなります。

地名には二文字の「良き名」をつけることが命じられます。（※1・2）

そのため、奈良では「いたみ」を「板見」と記載した時期もあったようですが、(※25・26)

地元「伊丹」という文字に落ち着きます。なぜ、この文字になったのでしょうか。

「伊」は殷の相・伊尹(いいん)の存在、藤原伊尹(これただ)伊周(これちか)などが摂政に就任、また伊勢や伊豆という地名の知識から「伊」を採用したのではないのでしょうか? 「伊」はもと「これ」「この」という意味ですが(※7)、元来の「いたみ」の原形ではないと考えられます。

「丹」とは魏志倭人伝にあるように、水銀と硫黄が化合した赤色の鉱石(硫化第二水銀)であり、赤い土、赤い、そして真心、良い薬、不老不死などの意味をもちます。(※8)

「遮莫れ、此の時に方って偉那公の祖たる上殖葉皇子の後胤、丹比公麿は姓を丹比の眞人と賜りて、初めての攝津職太夫に任じ、その後裔隆々乎」(川辺郡誌第4章第28節)

奈良の枕詞「青丹よし」などの知識から「丹」を採用したのではないのでしょうか?

丹波・丹後という地名の情報があったかもしれません。(※8)

つまり、「伊」「丹」という漢字は当時「良き字」と考えられたための採用でしょう。いずれにしても、漢字伝来以前に存在した「いたみ」の語源を知る材料にはなりません。

古文書等の「いたみ」の初見

先ほど私は、自説を反論されないためには、現在公認の歴史を学ぶ必要があります。と書き、歴史を知る材料としては、まずは古文書があります。と書きました。

「いたみ」は何時頃から文書に登場するのでしょうか?

登場年代の早いものは、

749年、昆陽寺の鐘に『伊丹坂』と記載があったようですが、鐘は後日の作で鑄造年を信用に値する古文書とは言えないでしょう。(※9)

つぎは、942年です。京都の空也堂の鉦の銘に「伊丹住光園作」と彫ってあるというものです。(※10)

しかし、その鉦は現存していません。そして、これが書かれたのが、江戸後期だということです。なおかつ、この文の最初に「言い伝えですが」となっているのです。また、「空也光勝」と書いてあるのですが、その時はまだ、空也は光勝の号を受けていないとされており(※11)、全体としてこれも信用できないとなっております。

次にでてくるのは、1180年です。この年は歴史に詳しい人はピンと来るのですが、源頼朝が伊豆で挙兵した年です。おのずと平氏も福原で挙兵し、東に向かいます。昆陽野から京都を通過して富士川へ行くというストーリーになります。

遷都したばかりの福原ですが、都を昆陽野(伊丹)に移すという話がでます。そして平氏や源氏が活躍する中で「伊多(太)美武者所」が文書に登場します。(※12)

「伊多美」が武士の姓名であったか、居住地であったかは確定できませんが地名であるとされています。武者所は今でいう警備課長というところでしょうか。これが、「いたみ」の初見とされていますが、ずっと後の奈良の文書には「板見」という記載がみられます。(※25)

また、「板見兵庫」を抹消してかたわらに「伊丹」と書いた文書もみられます。(※26)

「伊丹」の文字確定は何時頃なのでしょう?

1303年には「伊丹村」が初見資料となっていますが、正しくは伊舟村となっています。(※16)

「舟」は「丹」であるというのが通説です。ここで野間荘などの「荘」と伊丹村の「村」の違いを押さえる必要がありそうですが省略します。(※14)

1309年に伊丹左衛門三郎親盛が登場して、伊丹氏の初見とされています。(※13・17~20)
(伊丹市史での伊丹氏初見は1315年)

伊丹四郎左衛門尉妙(好)智=親盛の父、親資(ちかすけ)も登場します。(※19)

1337年には「糸溜村」という記載がみられます。(※21)

1352年は伊丹城の記載初文献となります。(※22)

「伊丹」は「伊丹氏」を名乗った一族の「伊丹城」があったところから、此の地を「伊丹」としたという説は成り立たなくもないですが、(※32・44)文字伝来以前から「いたみ」(の地)は存在していたと考えるほうが自然でしょう。しかし、此の地が遷都候補地の「猪名野」「昆陽野」さらに「有明の岡」をおさえ「伊丹」として残るのは、やはり「伊丹氏」の功績が大きいと思われま

伊丹の語源通説

先ほど私は、歴史を知る材料としては、「先ずは古文書があります。古文書は歴史の姿を鮮やかに浮き出してくれる大切な文化財だと考えています。」と書きましたが、古い記録は、文字をあやつることのできる、ごく一部の階級の人のものですから、考え方によっては書き手に都合のいい事柄だけを書き残したことも考えられます。本当の歴史にかかわる多くの庶民の歴史は「古文書」だけからでは得られないと思われま

す。文字の読み書きのできなかつた人たちを含めた歴史を知るためには「言い伝え」という材料があります。「地名」はその中でも大切な文化財です。言い伝えられた地名は否定することはできません。「地名」は今でこそ文字で書き表しますが、もともと「意味を伴ったコトバ」でした。コトバは生活に一番身近なものですから、昔を知るための大切な手がかりです。

前述のように、漢字そのものは「伊丹の語源」につながりません。では、「いたみ」の語源とはどのようなものでしょうか？

「伊丹の語源」についての従来の説明は数多くあります。

1. イタビ(木蓮子)クワ科の常緑低木のあった土地。という説があります。(※56~60)
「ビ」と「ミ」は国語音韻上最もよく変化しますので、一般的に発音からの語源の説明はこうなります。また、古代、川辺郡に隣接していた豊島郡桑津郷(現在伊丹市域)に中国の呉の国から、穴織(あやは)呉織(くれは)の織姫が猪名海の東海岸にある船着き場に到着し、この後2人の織姫は池田に移ります。そして盛んに養蚕を奨励し、この地に桑を栽植したことから、クワを関連させたものでしょう。では、植物イタビという語の発生はいつごろなのでしょう。疑問が残ります。
2. 物部木蓮子連公(もののべのいたびのむらじのきみ)に関連を求める説があります。(※2)前説
1. 植物名の一般的語源、そして日本の別名にも扶桑が使われていることから、著名人を探し出して融合させただけではないでしょうか。(※24~28・31・47)
3. イタミと読むのは誤用か、あるいはニの音がミにかわったものか、ニとミと変る例は多い。(※53)
これは言葉をいじくっているだけです。
4. イ(接頭語)タミ(撓・廻)が語源(※54・60)
これは、類似語を見つけてきただけでしょう

5. イタ(損・傷)タミ(辺の転)とありますが、わかりません。傷むの説明も全くありません。伊丹台地と海岸線の崖をイメージしたものでしょうか。(※48東京堂)
6. イタム(傷)の連用形(※54・60)
前項同様に何が、どこが、傷むのかが分かりません。
7. 猪名部氏の存在から古代朝鮮語で解くと、イはこれ・このという意味で、タムは鼻音で岸という意味。(い・む・ん)はミに転化する。(※64)
8. 板橋ありて板上(イタカミ)と言ひしを後ち転訛して(イタミ)と言う。(約音化説)(※32・33・34)伊丹の語源説明ではこの説明が一番多いと思われます。出典は「川辺郡誌」(※32)と思われませんが、もとは、「有岡古続語」(※33)からの引用でさらにこの出典は「有岡むかしばなし」(※34)ということになっています。ここで注目すべきは、「有岡むかしばなし」は「板上」を記載していますが、語源としては否定しているのです。これを梶曲阜は肯定し断定しているのです。(※35)
9. 紡績(いとつむぎ)の業を此地にてなせるに依り絲績(イトウミ)の地といへる。(※32・33・34)これも、前項8説と同じです。
10. 波おだやかな絲海(いとうみ)が広がっていた、転じてイタミになった。(※32・33・34)これも前項8説と同じです。
11. 入江となりしより、絲海(イトウミ)西海よりの入江の転訛。(※33)
これも、「有岡古続語」より、ですが、「西海よりの」部分は梶曲阜のオリジナルが感じ取れます。
12. 加藤治郎景廉、氏を伊丹と称し、これ伊丹の文字の出でし始めなるべし(※17・32・34・44・55)人名より地名の方が古いと考えられます。
13. 「いた(崩壊地形)」+「み(接尾語)」で、「川沿いの崩れやすい所」の意。とありますが、これは、(Web)で目にしたもので、出典は前記『地名用語語源辞典』(※60)『市町村名語源辞典』(※61)と思われます。
14. 「いた(崩壊地形)」+「かみ(上)」の転で、「段丘の上」とあります。これも上記同様(Web)で見たものです。出典は上記13説と同じでしょう。
15. 伊丹は「出水(イダミズ)」の略で、「泉」の意味。これは、最近の少数説ですね。行基の清水。金岡の清水。小井の清水。(※47)
寺本字関伽井、荒牧字清水、野間字清水田などを発想したものでしょうか。1説と同じく似通った言葉を探してきただけと思われます。「イタミ」発祥の区域地との関係や「イタミ」の語句が生まれた時期について調べてみたいですね。また、現在の地域住民は「イダミズ」や「いずみ」という語に馴染みがないですね。
まだまだ、いろいろ書かれていますが出処が同じところのものが多いですね。語源の説明は多く登場するのですが、全てに通じて言えるのは、「結局はわからない」ということになっています。「諸説ありますが…」良いことばですね。古代史は答えがはっきり出ない、想像を働かせる「あそび」があるのがいいところ。ロマンですね(笑)

伊丹の語源

さて、いよいよ最初の「伊丹の語源に対する持論」の話ですが、じつは、私に独自の説は無いのです。ただ、私が以前からボンヤリと考えていたことを明快に解説されている論文に出会いました。(※36~40)

私にとっては「目から鱗」だったので皆様にご紹介します。

まず1点目は、「いたみ」の名付け親は、「いたみ」の住人ではなく、瀬戸内海を西から進んできた人たちだった。というものです。

2点目は地名の語源は単独で考えるよりも、類似の地形や類似の地名に関連性を見出すという事です。そして、「浪速」「灘」「伊丹」等の語源は全て共通するというものです。

「浪速」は「ナミニハ」(※36・37)で「灘」は「ナミイタ」(※38)で「伊丹」は「イタナミ」(※40)で、全て「ナミ」という一つのキーワードで、3地点の地名の語源が総合的に解決できます。「ナミ」(並)には二つ以上のものがナラブ(並)ということと同時に、そこが良い所として安心して棲む、隠れてそこに居るというナブ(隠)の意味も持って連なっているということです。次に「イタ」ですが、「田」は中世の地名に頻繁にあらわれる稲作田ですが、古代においては「タ」は「居住地」であり「支配下」「政治地」でした。イツタ・イタ(斎田)とも呼ばれていました。そこが中世には「田」として開発されていきます。

瀬戸内海から渡来した人は陸地を見わたします。のちの武庫郡・菟原郡・八部郡の地が東西に3つに並んで南の海に臨んでいたわけです。背景に同じような山があり、同じような川が流れ込み、同じような「タ」が見渡せます。(※5および摂津国一覽絵図)

まさにこの地方を言ったナダ(灘)という語は海ではなく古代三国が並んだということ、ナミ(並)タ(田)という陸地を言ったものだったのです。言語音的にも、namiitaは容易にnamitaに変じうるし(狭母音脱落)、nami-ta>namta(同)>nanta(唇音退化)>nanda(鼻音連濁)>nanda(成音化)という変化は極めて自然なことです。

ナミタ(並田)からナダ(灘)ができたのではないかと。そうだとすると、個々の田をいっているのではなく、沢山の斎田が並んでいる。その(タ)のあるところ、という意がナダ(灘)の意味になってきます。

そして、比較地名の手法で語源が説明できます。「イタミ」は「徳弧ならず」という語にあやかっていけば「名、弧ならず、地名必ず隣りあり」というべきか。ナダ(灘)がナミ(イ)タであることを参考にすると、ナダの語順を逆にしたと思われるイタミ(伊丹)の語源はイタナミ(斎田並)であろうと推定できます。(※40)

古代日本語で語が複合する時、形容語が先に来てもまた後に来てもどちらでも同じです。「美しき花、咲きたり」の主語「美しき花」は「花の美しき」とも表現できます。「白き霜」と同じ意味で「霜の白き」ともいいます。形容語の自由性が地名にも行われていたようで「並んだ田」といっても「田が並んでいる」といってもよかったのです。前者の発想がナミ(イ)タであるナダ(灘)であり、後者が、イタナミであるイタミ(伊丹)です。イタミ(伊丹)のイタはイタ(斎田)またはイナタ(稲田)を意味し、あとのミはナミ(並)が2音節とも鼻音であるために約まってm音になったもので、要点的にいえば、ita-nami>ita-ⁿmi> itami> i-tamiのように変化した。狭母音のiがここでは語頭音として独立して「伊」の文字が当てられた。また、m-n音交替による誤用だとみるよりも、鼻音のmとnの区別の

つかない人たちの手でn音系の文字「丹」(tan)が宛てられたのだと表記面に関して理解すべきところでしょう。古く奈良で見られた「板見」の表記は本来の語源に近かったのかもしれませんが。(※25・26)

「イタミ」は、当時は海岸線でしたから、現在の阪神間の上陸地点の一つだったのです。(※5および摂津国一覧絵図)

そして猪名部氏などの登場となります。

私の受け売りの話は以上ですが、もしこれから先「伊丹」の語源を尋ねられた時には、この説が役立つかも?です。デハデハ。